かるちゃ～ナビ

ザ・見遊（みゅ～）じあむ

18

堺市博物館

（堺市）

原始から近代までの堺を解明

広大な仁徳陵古墳の前に広がる大仙公園。その深い緑の中に堺市博物館があります。

広い敷地に重厚な外観が特徴です。常設展の「堺―仁徳陵と自由都市」では、原始から古代、近代にいたる堺の歴史と文化を詳しく紹介・展示しています。古代では「倭の五王」たちが競い合って築いた陵墓、奈良時代では、堺の家原寺に生まれた僧・行基に関する資料が豊富です。全国を行脚して橋や池などを作っては民衆を助け、仏教を広めた行基の事績が展示されています。中世の堺は、四方を海や濠で囲まれた環濠都市でした。中世の堺を描いた「住吉祭礼図屏風」には神輿行列のようすとともに、町を取り囲む濠や木戸が描かれています。戦国時代に威力を発揮した鉄砲も、堺が最大の生産拠点でした。大和川の付け替え工事も大事業でした。仁徳陵の全体の模型がありました。実際の陵墓は一部分しか見ることができませんが、模型を見れば一目瞭然です。こうした、堺の特徴のある展示がいっぱいです。

堺といえば、茶の湯の千利休。館の植え込みの中に、千利休の銅像が建っています。また、博物館の正面にある庭園にはふたつの茶室と、国指定の重要文化財の旧浄土寺九重塔も移築されています。

重厚な外観の堺市博物館

ミュージアムメモ

▶所在地／〒590-0802堺市百舌鳥夕雲町２丁（大仙公園内）▶開館時間／午前９時30分～午後５時15分▶休館日／月・土・日曜日を除く祝日の翌日▶入館料／一般200円、大・高校100円、小・中学生50円▶交通／ＪＲ阪和線「百舌鳥駅」から徒歩５分▶問い合せ／072-245-6201

このシネマがえいが

「バッテリー」

家族の絆と少年野球への強い思い

原作は、１９９６年に出版されたあさのあつこの『バッテリー』。世代を超えて読者を広げ、累計３８０万部の大ベストセラーになりました。

ストーリーをかんたんに。中学校の野球部でバッテリーを組む巧と豪。順調にいっていたバッテリーでしたが、次第に技量の差ができたことで、バッテリーの解消を口にする豪。しかし、巧の弟で病弱な青波はそんな2人のバッテリーを好ましく思い、解消には不満で何とか続けてほしいと願いますが、病気で倒れてしまいます。そんなときに、強豪チームとの対戦がやってきます。2人が再びバッテリーを組む試合に向けて、青波が必死の思いで懇願します。「お兄ちゃん、きっと勝って！」

野球への能力も自信もあふれた中学生の原田巧が、野球を通じて家族や友人、まわりの人々との人間関係をつくりあげていくようすがていねいに描かれ、見るものの心を強くゆさぶります。主人公の少年には、全国から３０００人のオーディションをへて選ばれた新人の林遷都くん。野球でバッテリーをくむキャッチャーの永倉豪に山田健太くん。

原田巧の両親には、岸谷五郎と天海祐希、祖父には菅原文太。

摂津 河内 和泉 おおさか三国誌

18

（交野市）

星の降るまち・星田

生駒山系の北端に位置する交野市星田。星の名がつくだけあって、このあたりは星にゆかりの伝説がたくさんある地域です。

ＪＲ学研都市線「星田駅」で降りて、山手に向かって歩いていくと、星田妙見宮があります。妙見さんと呼ばれ親しまれています。春は桜並木が続きます。ご神体はふたつの巨石で、「織姫石」と名前がついています。近くの「星の森」には、その昔、弘法大師がこの地の洞窟に入り、秘法を唱えると、天から北斗七星が降ってきてそのひとつがこの地に落ちたという伝説があります。

ゆるやかな傾斜を登っていくと、大吊り橋「星のブランコ」が姿をあらわしました。大吊り橋は、全長約２８０メートル、最大高低差50メートル。これはけっこう長く、大きい。しっかりしたワイヤーに太く大きな支柱、横幅は１・５メートルくらい。１９９７年10月に完成したこの吊り橋は、「星のブランコ」と命名されました。星田の地名と、このあたりに七夕伝説があるところからの名前。ブランコは吊り橋だけによく揺れるからでしょうか。スリルもあって、通行料金もいりません。最近は交野市の観光名所になっています。

吊り橋からループ状に下っていくと、星田園地内にロッククライミングの人工登はんのゲレンデがあり、若い人たちが岩にへばりついています。車道に沿って流れている川は「天の川」です。

全長280メートルの見事な吊り橋「星のブランコ」
大阪府下にこんなスゴイ景観があったとは

大阪の戦跡を歩く 第17歩

禁野（きんや）火薬庫跡

（枚方市）

大爆発の惨事で700人が犠牲に

中宮団地の敷地に残っている
火薬庫跡の土塁

「３月１日」は枚方市平和の日です。1939年（昭和14）のこの日、枚方市にあった旧陸軍禁野火薬庫が大爆発をおこしたのです。天地をゆるがす大爆発が約４時間にわたって、29回おこりました。この事故で、死傷者は約700人、全半壊した家屋は821戸におよぶ大惨事でした。禁野火薬庫は1897年（明治30）から火薬の格納が始まり、戦火の拡大とともに拡張し、1933年（昭和８）には43ヘクタールもの大弾薬庫になりました。戦後、禁野火薬庫跡は中宮団地として造成されましたが、歴史的な大惨事を忘れてはいけないと、枚方市が爆発から50年後の1989年（平成１）に、「平和の日」と制定しました。いま、中宮団地の一角に当時の土塁が残っています。

いまも心に響く名詩・名歌・名語録

諸君、喝采を喜劇は終った
ベートーベン

ベートーベンの臨終の言葉。「楽聖」と呼ばれたベートーベンが亡くなったのは1827年３月26日。葬儀には３万人ものウィーン市民が駆けつけたといわれています。ベートーベンの音楽は今も生き続けていますが、その影響は意外なところにも。1982年に規格化された音楽ＣＤの最大収録時間は74分とされていますが、これは、ベートーベンの「交響曲第９番」がカラヤン指揮による演奏時間が74分間だったことによります。

人の一生は重荷を負って遠き道をゆくが如し
徳川家康

徳川家康の遺訓として美術店などで額に入ったものを見かけます。しかし、実際に家康がこの言葉を残したという記録はありません。遺訓はこのあと「急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望み起こらば、困窮したるときを思い出すべし。堪忍は無事長久のもとい。怒りは敵と思え。勝つことばかり知りて負けることを知らざれば、害その身にいたる。己をせめて人をせめるな。及ばざるは過ぎたるよりまされり」と続きます。